

言語習得理論からみた ベーシックイングリッシュの意義

水野光晴

1. はじめに

私は2年前に「視界ゼロ時代における外国語教育」(現代英語教育 No. 11, 1990)なる論文を書いた。それから間もなく、ベルリンの壁崩壊、新生ドイツ誕生、湾岸戦争、バルト三国の独立、ソ連邦解体と共産主義の消滅等々の大事件が立て続けに発生した。国内でもリクルートや消費税の嵐が吹き荒れ、証券、金融スキャンダルとバブル経済の崩壊で大きく揺れ動いている。われわれは今まさにガルブレイスの説く不確実性の時代にいる。このような視界ゼロの時代にあっては、従来固定化した官僚制型組織はもはや機能しえない。今日は、人口移動が高く、高度の分業化によっていろいろな問題が複雑多岐に錯綜しており、人間関係すら往々にしてその場かぎりになっている。それ故、一定のデータに準じて仕事を進めても、期待したとおりの成果は得られず、次から次へと予期せざる出来事に巻き込まれることになる。このような時代には、新しく発生した問題に対し、それに関連するあらゆるエキスパートのネットワークを利用して、敏速に問題を処理する問題解決型組織でなければついてゆけない。

今日われわれは、マーシャル・マクルーハンがかつて予告したグローバル・ヴィレッジにいるのである。法務省入国管理局の発表によれば、昨年1年間に出国した日本人は1000万人を超え、海外在留邦人(長期滞在者と永住者の合計)数も62万人を突破した。一方、日本に入国した外国人も360万人を超えたという。また国際文化教育センター(ICS)の調査によれば、現在米国に留学している日本人は、10年前のほぼ2倍にあたる約2万4000人で、海外からの外国人留学生は4万人を突破した。さらに、昨年度、海外生活を体験した高校生は7万人以上になることが文部省の高校国際交流状況調査で明らかになった。国際化、情報化の進

展でハイテク＝ハイタッチとなり、これまでの時代とは比較にならないほど人と人との接触が一層緊密になっている。それ故、地球の一部で起こっている出来事が、あたかもわれわれの眼前で起こっているかの如き現実感を伴って体験される時代である。マスメディアによって醸し出されるこのようなバーチャル・リアリティーのお蔭で、われわれは刻一刻とこの地上で展開されるあらゆる出来事に大なり小なり無関係ではありえない。

日本の常識は往々にして世界の非常識であり、日本にとってプラスになることは、往々にして国際的にはマイナスになる。とりわけ、今日の日米関係はきわめて不安定である。そこでわれわれは、今後双方がよほど努力を重ね、腫れ物に触るような慎重さで臨むのでなければ、きわめて危険な事態になることを肝に命じなければならない。その端的な例が、日本の閣僚の失言であり、それによって世界中が面と向かって自分に投げかけられたかの如く過敏に反応する時世なのである。

今日のようなさまざまな異質の集団から成り立っている地球村にあっては、人々の共通の理解の基盤というものが存在しにくい。それ故言葉が人と人を結びつける貴重な役割をはたすことになる。西洋では古くから、雄弁術とかパブリック・スピーキングの技術が重用され、人々は異質な集団の中でも緊張を和らげる手段として言葉による表現に心を砕いてきた。われわれは、今好むと好まざるとにかかわらずそのような表現術を身につけるべき立場にある。すなわち、今日のような情報化時代にあっては、みずからを有効に情報化できる個人のみが生き残れるともいえる。したがって、その手段としての国際的なコミュニケーション能力を身につけることは焦眉の急になっている。しかもこの目的を果たす上で英語が有力な手段のひとつであることは自明であろう。さらに、今日の日本がおかれている立場からして、異質なものへの理解というインターナショナルな理想を追求することこそ日本ナショナリズムの中軸とすべきものである。そのためにも、国際的な伝達手段をわがものにするのが不可欠であろう。そしてそれはいまのところ英語である。

2. 人間コミュニケーションの基本単位

コミュニケーションは、個人間の相互作用から国際的な関係に至るま

で、人間の社会生活のあらゆる側面においてきわめて重要な役割を果たしている。また、コミュニケーションは、社会のシステムや文化とも密接なかかわりをもっている。現在においては、情報伝達の新しい手段が つぎつぎに開発され、コミュニケーションの様式や内容に大きな変化が生じつつある。

人間のコミュニケーション活動を動物のそれと区別するものは媒体（メディア）の利用である。メディアを用いた対人コミュニケーションの代表は、手紙と電話である。手紙は“文字”を用いるのに対し、電話では“音声”を用いる。手紙のやりとりでコミュニケーションを行えば時間がかかるが、電話ではその場で返事が得られる。他方、手紙では後で読み返すことができるが、電話の場合はさらにレコーダーを設置しなければならない。

近年、情報通信分野において、科学技術の進歩、普及と連動して多くのニューメディアが登場してきた。音声のみであった電話は、テレビ電話として画像を送り、ファクシミリとして文字を送れるようになった。さらに、その回線を利用してパソコン通信を可能にしている。また、日本電気は昨年、日英双方向の自動通訳システムを開発した。KDDも国際電話の通訳サービス利用件数が前年度比75%増加したと発表している。このようなハイテク通信技術の登場は、果たしてこれまで指摘されて来た言葉による国際コミュニケーションの問題を全て解決することになるのであろうか。

コミュニケーション過程において、送り手が伝達するメッセージは言語と非言語の2種類のチャンネルを通して伝わる。バードウィステル（Birdwhistell, 1970）によれば、これらのメッセージのうち35%は言語に変換され、残りの65%は非言語的な手段で伝達されるという。人は非言語シグナルを送り、受け手は自分に与えられた手掛かりをほとんど意識しないまま反応したり、如何なる理由で自分が反応しているかに気づかないことがしばしばある。このようなシグナルは、顔の表情、ゼスチャー、視線、声の調子、姿勢、座る位置、他者からの距離など、大部分が非言語的に表現されるものである。このような非言語的表現は、いろいろな原理に従っていることが多く、かなり齏一的な効果をもつものである。従って、これらの手がかりは送り手の意図について何かを述べ

ていることになり、コミュニケーションシステムの一部とみなすことができる。しかし、このような非言語的シグナルは一般にノンバーバル行動とは言わない。

ノンバーバル行動は言葉に代わるものである。それは社会的に分有されたコードによるメッセージの意図的伝達である。すなわち、メッセージを送る手段として、言語ではなく、ノンバーバル行動を用いる。もちろん、それがコミュニケーションとして機能するためには、送り手がある行動を符号化 (encode) して送り出したものを、相手はその意味をその通りに解読 (decode) してくれることが必要である。

ノンバーバルコミュニケーションには言語的コミュニケーションを補完するはたらきと、ノンバーバル行動でしか表現しえないはたらきがある。たとえば、われわれは言語行動とノンバーバル行動とに一貫性があるかどうかを、真実か虚偽かを判断する基準として用いる (Friedman, 1979)。すなわち、言葉で示された感情と、言葉以外の行動で示された感情の間に一貫性があるか否かで、人は真実か否かを判断する。一貫していれば、その人は誠実で正直な人だと推論されるのに対して、一貫していなければその人は不誠実で偽善的だと判断される。

異文化間コミュニケーションを考える場合、“文化”と“コミュニケーション”という2つのキーワードが重要な変数となる。コミュニケーションは社会的相互作用であるため、少なくとも2人のコミュニケーターが必要であり、各々はそれぞれの“文化”を有しているものである。そこで、異文化間コミュニケーションにあっては、各コミュニケーターの文化の違いに起因する判断基準が「ノイズ」となって伝達されるメッセージの正確な解釈過程を妨害することになる。

それ故、異文化間コミュニケーションでは、双方のコミュニケーターが自己文化中心の姿勢をくずさないかぎり、相互の意思疎通は成立しない。とりわけ、文化によって同じノンバーバル行動の意味するものが異なっている場合がある。つまり、同じメッセージが文化によっては同じことを意味しないことがあることに注意しなければならない。したがって、異文化間コミュニケーションを成立させるには柔軟な心が必要で、真に相手の文化を尊重する心構えがなければならない。相手の文化を知ること、理解すること、受け入れること、自分の生活にそれを統合する

ことが必要である。

メディアによるコミュニケーションは、いずれも人間コミュニケーションのある一面を犠牲にしているという点で不完全なものである。したがって、ハイテク＝ハイタッチで世界が物理的にますます小さくなりつつある今日でさえ、各国の重要な問題は、首脳会議あるいは国際会議という場で処理されている。

人間コミュニケーションの基本単位は面談 (dialogue) であり、メディアによるコミュニケーションには、何らかの制約が伴うことを覚悟しなければならない。自動翻訳機にはさらにもう一つ別の制約が加わることになる。すなわち、ある言語を別の言語に翻訳する作業は、言葉の記号性と喚起性を考えれば無限の誤解を承知のうえでするのでなければ出来ないことなのである。言葉は物そのものではないから、人間は無限にウソをつくことが可能である。この言葉の象徴性を生かせば文学が生まれる。また、本来実体のない言葉は社会的に使用されるうちにさまざまなイメージを喚起して一人歩きするようになる。

日常われわれは非言語的メッセージを通して無意識のうちにたえず言葉の記号性や喚起性をチェックしているのである。ところが、媒体を利用したコミュニケーションでは非言語的なシグナルや非言語的メッセージの多くが限定されているばかりか、メディアによって伝達される言語的メッセージそのものも相当な制約を受ける。

媒体を利用したコミュニケーションは現代社会では必要不可欠なものとなっているが、対面状況のコミュニケーションにくらべ、非言語的メッセージがかなり制約されるため、正しい判断をすることが難しい。したがって、科学技術がいかに進歩しても、今日のように民族間、人種間の摩擦がますます深刻の度を加えつつある国際社会の中では、より円滑な意思疎通を実現するための国際的な会話能力を身につけることが不可欠になるわけである。

3. 語学の必要条件

日本は現在世界でも有数の技術先進国であり、高等教育進学率は米国に次いで高い。しかし、英語を駆使できる日本人はきわめて少ない。その原因は地理的環境、文化水準の高さ、言語構造の違い等々いくらでも

挙げられるが、これらをもって己の語学力の低さをかこったり、英語で対等に議論できないことを正当化するのは不毛の言い訳とそしられても致し方あるまい。

わが国に英語恐怖症が如何に多いかは、至るところで目につく英会話教材、英会話学校の宣伝広告のおびただしさをあげれば充分であろう。今や英語は日本のベスト・セラー商品である。書店では英会話に関する書籍、テープ、ビデオソフト、レコード等々で一つのコーナーを埋め尽くすほどである。英語の放送番組は、ラジオ、テレビ、あわせて毎週約220本にもものぼり、その視聴者は約100万人と言われる。これはまた、日本人の英会話に対する関心の高さのあらわれでもある。ちなみに、NHKによる昨年度の人気学習関心項目調査のトップは英会話であった。

英語は日本の第一外国語であり、義務教育3年、高等教育でさらに3年あるいは7年にわたって学習される。しかし、近年その成果を疑問視する声が高まり、英語教育は今曲り角にさしかかっている。つまり、わが国の英語教育は、時間と労力をかける割には効果が少ないといわれている。

ところで、このようにわれわれ日本人の英語学習に手かせ足かせとなって来たものは、教養主義に代表される知識偏重の教育観であり、西洋崇拜からくる西洋コンプレックスであり、受験英語によって助長された瑣末主義、完璧主義、度重なる技術革新によってうえつけられてきた効率主義にある。欧米の日常会話は、知識人であっても、教材テープで聴くような完璧な英語ではない。ネイティブ・スピーカーの英語は、文法的にも語法的にもかなりの粗さが目立つ。音声面でも発音上の歪みや、母国語風のなまりが顕著な人が少なくない。しかし、そのような発音や抑揚の歪みや文法上の破格は、コミュニケーションの上でなんら障害にはならない。その点、日本人の英語教師は、重箱の隅をつつくような余りにも細かいことに拘泥しがちである。

日本人を英語恐怖症に駆り立ててきたもう一つの原因は、英語が大学入試の試験科目の一つであることと無関係ではない。入学試験で良い点をとるためには、何よりも正確さが求められる。その結果、学生は一つでも多くの単語やイディオムを詰め込み、英文の空欄に前置詞等を如何

に素早く正確に入れるかといった技術を磨くことに腐心する。しかし、大学入試ではその完璧主義は一步も譲歩しないので、文法的欠陥をもつ解答は全く考慮されない。

英会話学校が日本で繁盛する原因の一つは、日本の社会に深く根ざしている効率主義にうまく乗ったところにある。日本の経済力の伸張に伴い、わが国に対する世界からの要求と関心に対して、英語を用いて口頭で弁明することが急務となってきた。そこで一日も早く英語をマスターしようと勢い込むが、何に手をつけてよいのかわからない。そこで、手取り早く英会話学校に駆け込むという図式になっているのであろう。

語学を成功させる必要条件は『高いモチベーション（動機）』と『正しい学習のアプローチ』である。モチベーションは情熱と置き換えてもよい。日本人の多くが英会話の習得に高いモチベーションを持っていることは既に述べてきたところである。しかし、情熱だけでは語学は成功しない。力の入れどころが悪ければ、真面目に努力すればするほど自信喪失に陥り、その語学が嫌になるか、自己嫌悪に陥り、ひいては自殺する羽目にもなりかねない。これは冗談ではなく、事実3年程前に新聞紙上で報道されたことである。

今日の日本では、語学にとって方法論がいかに重要であるかをいくら強調しても強調しすぎることはないように思われる。その証拠に、語学には膨大な費用がかかるとか、知能指数の高い人しかマスターできないという迷信がこの国にあるようである。また、少なくとも英語は理科や社会と同じ学科目の一つであると考えている人が多い。これらはいずれも「好きこそものの上手なれで、永く付き合っていれば知識も豊かになり、いつの日か自由自在にその言葉を使えるようになる？」という思い込みにすぎない。そして、多くの人はずっと黙々と単語やイディオムの数を追いかけて、会話の定型表現の丸暗記に努めている。そのこと自体は決して非難されるべきことではないが、物事の道理がわかった者には端で見るにつけ、隔靴搔痒の感をぬぐいきれないのである。

4. 言語習得理論の示唆するもの

正常な人間ならば、誰しも2本脚で歩く。逆立ちして街を歩く人はい

ない。しかし、こと語学に関しては、逆立ちして学習している日本人が多いのではないかと考えざるをえない。われわれの生理に反したことをしても無理があるから永続きしないし、期待した成果も得られない。人間の言語習得能力は生得的に人間の体内に埋め込まれているものである。したがって、人間の言語をサルやイヌに学習させようとした例がこれまで幾つもあるが、いずれも成功していない。言語習得のメカニズムは元来人間だけに備わったもので、それが特定の言語環境にさらされることによって漸次発現されるものである。

チョムスキー (N. Chomsky, 1957) は、当時の言語教育の一般通念をくつがえし、言語習得は決して模倣、記憶あるいは正しい発話に対する報酬にもとづくものではないと主張した。人は全て生まれつき言語獲得装置 (Language Acquisition Device) をもっていて、外部からの言語刺激により、幼児は比較的短期間に非常に複雑な言語体系を自由自在に駆使できるようになる。ロジャー・ブラウン (R. Brown, 1973) とスロービン (D. Slobin, 1971) は、幼児の目標言語が何であっても、その学習行動がすべての幼児に共通しているという驚くべき事実を明らかにした。

幼児は自分で会話するまえに、まず成人の言葉を理解できるようになる。次にイントネーションによって音声タイプを識別できるようになり、親切な声か怒った声かの区別が可能になる。生後2週間は物音に反応しているが、4週間目からは人声に反応するようになり、やがて音声と関連するものを認識するようになる。すなわち、ある種の音声ないし音声連鎖を場面的脈絡にもとづいてコミュニケーション手段として有効に使用し始める。

生後1歳では、成人の文は理解できるが、アウト・プットは一語だけである。幼児は最大のコントラストと最小のエネルギの原理にもとづいて音韻を習得し始める。生後1.6歳から二語文となり、生後3歳では約900語の語彙を獲得して、肯定平叙文、疑問文、否定文等の基礎文法能力を習得して使用し始める。

他方、成人の第2言語習得の研究は第1言語習得の研究に触発されて急速に発達して来た。次にその成果を簡単にまとめてみたい。ポストフスキー (V. A. Postvsky, 1975) の実験によれば、学習者が新しい言語

の学習を開始してから、自発的に話し始めるまで、少なくとも2～3週間から数ヶ月間の沈黙の期間 (Silent Period) を必要とする。学習者は、この理解の期間があるために、その後言葉を容易に話せるようになる。多くの外国語コースでは、学習者に第1日目から新しい言葉の文型を反復練習させ、その言語を話すよう強要するが、言語の学習を開始した直後に、その言葉を話すように強要するよりも、自然に話し始めるまでしばらくの間待つ方が得策のようである。

ラーセン・フリーマン (Larsen-Freeman, 1975) やクラッシュェン等 (S. D. Krashen *et al.*, 1978) は、言語の習得には意思伝達のために言語を使用する状況を提供することが大切であると述べている。

第2言語の学習には、3つの心理作用が機能している。これらの作用のうちの2つは「フィルター (filter)」と「オーガナイザー (organizer)」とよばれる無意識的作用であり、他の1つは「モニター (monitor)」とよばれる意識的作用である。フィルターとは、情意因子にもとづいて入力言語を無意識にふるいにかける心理作用である。言語習得のためには、学習者の不安を低くし、仲間意識や一般的動機づけを高めて、このフィルターを下げるようにすべきである。

オーガナイザーは、新しい言語体系を徐々に作りあげる無意識的な認知メカニズムである。レネバーグ (E. H. Lenneberg, 1967) は、脳の一側化 (大脳の左半球と右半球の機能の特殊化) が幼児期に発達し始め、思春期後に完了するので、それ以後はオーガナイザーの機能が低下すると仮定した。しかし脳の一側化は5歳までに完了するので、5歳以後の児童は成人と同様に第2言語習得が可能である。

モニターは、学習者が表出した形式をときどき訂正する意識的自己調整作用である。しかし、これまでの研究によれば、学習者が犯す文法的誤りの訂正は、ほとんどの場合言語習得にとってプラスにならないということである。したがって、その言語を習得させるためには、教師は、言語形式に注意を向けさせたり、文法規則を意識的に暗記させたり、誤りを指摘したりしない方がよい。規則を知っていることは、その規則を使用できることを必ずしも意味しない。複雑な文や構造を表出する能力はむしろ無意識的な心理作用の結果である。

さらにベバー (T. G. Bever, 1970) とスロービン (D. Slobin, 1971)

は、言語学上の複雑さと学習上の複雑さは必ずしも一致しないと指摘した。これまでの外国語教育では、学習上の複雑さと言語学上の複雑さを混同して、言語項目を誤った順序で提示してきたきらいがある。

さらに、翻訳は、第2言語学習者が行う自然な意思伝達を阻害し、第1言語の構造への依存度を人為的に増すものである。第1言語の第2言語への干渉は、幼児では5%、成人では20%にすぎないが、学習者の発音においては莫大な影響を与える。つぎに、これまでの言語習得理論の示唆するものにもとづいて、人間の言語習得に則した無理のない合理的な語学のアプローチを考えてみよう。

言語は、文化および人間の心理作用と密接に絡み合っている。それ故、言葉は有機的な社会・心理的ゲシュタルトである。しかも、われわれがコミュニケーションする場合、最終的に必要になるのは言葉の意味であるが、意味はその言葉のもつ音のルール（音法）や構造（文法）及び、文脈等にたえず左右される。したがって、言語習得理論では音と意味を対応させる準備期間として、初期の学習者における沈黙の必要性を示唆している。タブラ・ラーサの状態でこの地上に誕生した幼児は、発話する前に音声タイプを識別し、物と音の対応を認識するようになる。すなわち、このように感覚的な裏付けでインプットされた音声だけが意味を獲得するのであるから、語学ではこの音法（phonetics）をしっかりと身に付けることが何よりも優先されなければならない。

コミュニケーションの理解度を大きく左右するものにアクセントの位置、つまりリズムがある。あらゆる言葉にはその言葉特有のリズムがある。日本語は音節の数でつくられる syllable-timed rhythm であるが、英語は音節が強と弱で発音される stress-timed rhythm である。しかもこの強弱アクセントは、息の力で行われる。したがって、英語の音を最も英語らしく発音するコツは腹式呼吸である。中でも破裂音や摩擦音を発音する場合は、腹式呼吸をしなければうまくいかない。

ひととおり音声をマスターすると、幼児は語彙を獲得し始める。一語文からスタートして、接続文を用いて自由な意思疎通が可能になる3歳児では約900語を獲得している。国際コミュニケーションの手段としての語学をする場合でも、約900語程度が自由な意思疎通を達成するのに必要な基礎語彙と考えられる。ところで、コミュニケーションに不可欠

な基礎語彙を何語に制限し選択するかという問題は、言語教育の能率を上げるうえできわめて重要である。英語の場合も、語彙選定は昔からいろいろ試みられて来ているが、その選定基準が頻度によってではなく、思想表現に有用であるか否かによって選定されるものに Basic English 850語がある。

5. ベーシック・イングリッシュと GDM

Basic English は、英語の中でも使いみちの多い850語を用いて、日常のコミュニケーションに役立たせようという目的から、英国ケンブリッジ大学のオグデン (C. K. Ogden, 1930) によって工夫された一種の言語組織である。この850語は Operation (動詞、助動詞、代名詞、および前置詞) 100語、Things (名詞: 400General+200Pictured) 600語、Qualities (形容詞) 150語からなる。動詞は、come, get, give, go, keep, let, make, put, seem, take, be, do, have, say, see, send の16語で、助動詞は may, will の2語のみである。

この850語の選定は意味論的観点から行われたが、その基準は有用性 (usefulness) である。したがって、語彙の有効度が高く、わずかな850語で非常に豊かな表現ができる。また、同音異義の語がほとんどないので発音上の混乱がないし、学習すべき語彙の数が少ないので綴字や発音を学習する上で負担が少ない。他方、極度の語彙制限のため、表現に無理がでたり、慣用性からはずれるという批判がなされることがあるが、多数の新しい語やイディオムを学習し続けることに較べれば、その負担ははるかに少ない。

さらに重要なことは、2年以上にもわたって多くの語彙を学習しながら、実際のコミュニケーション場面で何も話せないのは、少数の基本語彙に十分精通していないからである。道具が多くなればなるほど、それらを使いこなす上でエネルギーの負担が増えるし、荷物が増えればそれだけ重くなるから、自由に立ち回れなくなるのは理の当然であろう。

オグデンは動詞の数を極力切りつめることにより、文構成のルールを簡単なものにしようとした。すなわち、通常の英語では一語で表現するところを16の基礎動詞と前置詞を結合させ、いわゆる動詞句をつくることによって多くの動詞の意味を示す工夫をしている。たとえば、We

control it. の代りに We have control of it. He wants it. と言わないで、He has a desire for it. と言う。また、pass は go by, pursue は go after, enter は go into などの句を利用する。

できるだけ少数の語であらゆるコミュニケーションに利用すべく選定された850語であるから、頻度 (frequency) の高い語を選ぶよりも、有用性の高い語を採用している。たとえば、chair, bench, stool の代りに、頻度は高くないが、1語で他の3語の代りになる seat を用いるのである。したがって、これら850語を巧みに用いるならば、優に2万語に相当する働きをされるといわれる。

Basic English の “Basic” は、ただ単に「基礎の」という意味ではなくて、British, American, Scientific, International, Commercial の頭文字であるから、和訳しないでそのまま「ベーシック・イングリッシュ」と呼ぶ方がよい。Basic English は、普通の英語の中から適切なものを選択したものであるから、決して変質した英語ではない。“If it is bad English, it is bad Basic!” (もし英語として悪ければ Basic としても悪い) というのが Basic English の主張になっている。この英語システムは、本来ドイツの哲学者ライプニッツ (Leibnitz, 1646-1716) やイギリスのジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) の意見に暗示を得たものである。

ところで、現在では Basic English に三つの目的があるといえる。(1) は人工言語エスペラントが実用的ではないので、一般的な通信、科学、商業のための国際補助語 (International Secondary Language) となること。(2) は外国語として普通の英語を学習するための入門段階になること。(3) は思想や表現を明確にするための補助的訓練の手段になること等である。

ケンブリッジ大学で、オグデンとともに研究を行っていたリチャーズ (I. A. Richards, 1940) はハーバード大学に移り、協力者のギブソン (Christine Gibson) とともに、Basic English にもとづく英語教授法 (Harvard Graded Direct Method, 略称 GDM) を開発した。この GDM はすべて外国語をその言語で教えるという点では、一種のダイレクト・メソッドであるが、教材が厳密に段階づけられているということ、すべての文型を場面とともに提示し、英語の場合はベーシック・イングリッシュ

リッシュを使用するという点で、従来のダイレクト・メソッドとは根本的に異なる。

GDMの基本原理は、(1)グレーディング (grading) と(2)セン・シット (Sen-Sit) である。すなわち、グレーディングとは、教材を学習しやすいように段階づけることであり、セン・シットとは Sentence in Situation の略で、文型をすべて場面とともに提示することである。これらの原理の基礎になっているのが意味論とゲシュタルト心理学の「場」理論 (field theory) である。

グレーディングの原理は、一般には難易度を基準にするが、リチャーズは包括性を基準に、root sense から metaphor へ、多くのものを内包しているものから、内包性の少ないものへ、general から particular へ、あるいは、全体から部分へという原則を設定した。たとえば、breakfast, lunch, dinner より meal を先に教える。それは、meal という語が general なコンセプトであるのに対して、breakfast や lunch はより狭い意味範囲の語、すなわち、particular だからである。

GDM は教材間の有機的つながりを重視して、実物や絵によって語や文を提示する。また、身近なことを発表するのに役立つ有用な語から教える。また、発音の練習や、語や文の提示にはコントラストを利用する。文の提示も既習の文をより定着させるように配慮される。文法の提示順序も、構造上の難易度にもとづくのではなく、意味上の難易度にもとづいている。

ゲシュタルト心理学の中で、はじめて学習の問題をとりあげたのがレヴィン (K. Lewin, 1890-1947) であった。彼は「場の理論」において、精神現象や社会現象を、人とそれを取り巻く環境との相互依存の全体構造としてとらえるべきだと主張した。Sen-Sit の原理も、このゲシュタルト理論の影響を受けている。すなわち、言語は記号であるからそれ自体に意味はないが、ある場面の中で言葉が用いられると、学習者の認知構造が変化して意味が生じる。この点から GDM では、語や文をすべて場面の中で提示し、生徒の立場から答えさせるという点で、他のダイレクト・メソッドとは著しく異なっている。

GDM が生徒の自発的発表活動と達成感によって学習をすすめる点は、意思伝達のために言語を使用する状況を提供すべきであるとする言

語習得理論そのものである。また、グレーディングの原理は、言語学上の複雑さと学習上の複雑さは必ずしも一致しないから、言語項目は学習上の複雑さにもとづいて提示すべきであるとする言語習得理論の知見を裏付けている。さらに、Sen-Sit の原理は、言語形式や規則に注意を向けさせて、モニターを働かせることのないようにすべきだとする最近の習得研究の知見とも見事に整合している。また、GDM は母国語を一切使用しないので、第1言語構造への依存度を人為的に増し加えることもない。したがって、学習者は極自然に意思伝達のスキルを身につけるのである。

Basic English は、今から60年程前に開発された言語システムであるが、言語教育史の上で最も理論的で最も体系化されたアプローチといえる。今日、世界人口の5分の1以上が何らかの形で英語を話す。特に科学者の60%以上は英語が読めるし、郵便の70%は英語で書かれ、電子データベース情報の80%は英語を基礎としている。イギリスはいま、急激な民主化が進む東欧諸国へ英語を輸出すべく官民あげて取り組んでいる。とくに英語の教育市場は、92年末までに全体で15億ポンドに膨れ上るとみられる。言語を制するものは経済も制するというわけである。GDM は素早くある程度のオーラル・イングリッシュを習得するには非常に有効である。Basic English に習熟すれば、意思疎通には事欠かない。さらに、これを足場に Full English へと拡大してゆくことは容易であり、合理的な学習の進め方といえる。今や Basic English は実用的な国際英語への近道であるといえよう。

—完—

参考文献

- 小高一夫、1967、「GDM について」、『英語教育』、大修館、7月増刊号。
 升川潔、1975、『言語理論の生かし方』、開隆堂。
 水野晴光、1985、「我国の英語教育の問題点」、神戸女子短期大学学会、『論攻』、第32号、119-132。
 室 勝、1972、『Basic English の文体』、GDM 英語教授法研究会出版部。
 室 勝、1972、『Basic English as a Sorting Machine』、GDM 教授法研究会出版部。
 吉沢美穂、1978、「グレイデッド・ダイレクト・メソッド」、『現代の英語教育 3』、研究社。
 Bever, T. G., 1970, The Cognitive Basis for Linguistic Structures. In J.

- Hayes (Ed.), *Cognition and the Development of Language*. New York : John Wiley & Sons.
- Birdwhistell, R., 1970, *Kinesics and Context*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Brown, R., 1973, *A First Language : the early stages*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Chomsky, N., 1957, *Syntactic Structures*. The Hague : Mouton.
- Dulay, H., Burt, M., and Krashen, S., 1987. *Language Two*. London : Oxford University Press.
- Friedman, H. S., 1979, The interactive effects of facial expression of emotion and verbal messages and perceptions of affective meaning. *Journal of Experimental Social Psychology*. 15, 453-469.
- Galbraith, J. K., 1967, *The New Industrial State*. New York : Houghton Mifflin Company.
- Krashen, S., 1978, Individual variation in the use of the monitor. In W. Ritchie (Ed.), *Second Language Acquisition Research : Issues and Implications*. New York : Academic Press, 175-183.
- Larsen-Freeman, D., 1975, "The Acquisition of Grammatical Morpheme by Adult ESL Lernerers", *TESOL Quarterly* 9, 4, 409-419.
- Lenneberg, E. H., 1967, *Biological Foundations of Language*. New York : John Wiley & Sons.
- McLuhan, M., Fiore, Q., & Agel J., 1968, *War and Peace in the Global Village*. New York : A Bantam Book.
- Mizuno H., 1985, A Psycholinguistic Approach to the Article System in English, JACET. 『紀要』、第16号、1-29.
- Ogden, C. K., 1968, *Basic English : International Second Language*. New York : Harcourt, Brace & World.
- Ogden, C. K., & I. A. Richards, 1923, *The Meaning of Meaning*. London : Routledge & Kegan Paul. 石橋幸太郎 (訳) 『意味の意味』、新泉社、1967.
- Ogden, C. K., 1932, *The ABC of Basic English*. London : Routledge & Kegan Paul. Reprinted, Tokyo : Hokuseido Press, 1986.
- Ogden, C. K., *The Basic Dictionary*. London : Routledge & Kegan Paul.
- Oksaar, E., 1977, *Spracherwerb in Vorschulalter*. Einführung in die Pädolinguistik. 在間進 (訳) 『言語の習得』大修館、1980.
- Richards I. A., & Gibson, C., 1973, *English Through Pictures : Book 1 ~ Book 3*. Pocket Books, Inc., Tokyo : Yohan Publications, Inc., 1985.
- Slobin, D. I., (Ed.) 1971, *The Ontogenesis of Grammar : Some facts and several theories*. New York : Academic Press.